

ある女子大学生のTAT解釈事例 —対象関係的思考の観点より—

廣瀬 隆・氏原 寛

An Interpretation Of TAT Of A University Woman
— From The Standpoint Of The Object Relational Thinking —

TAKASHI HIROSE and HIROSHI UJIHARA

問 題

人間にとって、対人関係とは、単なる物と物との接近とは異なり、心理的次元での交流によって成り立っている。我々は、過去の様々な対人的経験を通して、対人の世界についてのイメージを内的に保存している。他者と出会う時、このイメージを瞬時に構成し、外的対象を生きた対象として経験することができる。もし、この内的イメージが歪曲し外的な対象を反映しないものとなつた時、現実とはかけ離れた、理想化されたあるいは脅威に満ちた対象世界が経験されることになる。このように、我々の経験する世界は、内的に保存しているイメージをもとにした想像の働きを通して成り立っているのである。いいかえれば、内的な対象イメージこそが自己と他者との関係をつなぎとめる働きをしているのである。このような、人間の経験する対人関係のあり様を把握するために最も有効なテストの1つとしてTATが上げられる。

TAT (Thematic Apperception Test)は、Morgan, C. D. と Murray, H. A.¹⁾ が空想の研究法として発表した投影法の1つである。彼らの理論的基礎は、精神分析理論、わけてもその力動的な人格理論に負うところが大きい。この力動的な考え方については、Laplanche & Pontalis²⁾ では、次のように端的に示されている。「心的現象をある種の心迫を及ぼすさまざまな力の葛藤と組み合せから生ずるものとしてとらえる観点」 TATでは、空想によって示された人物像相互のかかわりの分析を通して、被験者の内的な力動を覚えることに主眼が置かれる。

こうした観点から、Murrayらは、同一視された人物像とその状況との相互作用を形式的・構造的に解析するために「欲求一圧力分析」 (Need-Press Analysis)

を提唱した。この分析法は、我が国でも戸川³⁾、和田⁴⁾が若干改良して用いている。

以上のような欲動と環境との力動性を問題にする立場を基礎とし、自我心理学的な立場から欲動-自我-上位自我の力動的関係に着目し、自我機能を問題にしようとしたのがBellakである。TAT解釈にあたり、Bellak, L.⁵⁾ では次の2つの水準が念頭に入れられているようだ。1つは、Murrayと同様に同一視仮説に従い、物語の主人公がいかなる行動をとり、またその背景にいかなる環境を設定するかという観点から、被験者の人格を力動的に推論しようとする水準である。これをここでは、第1の水準と名づけておく。次に第2の水準と考えられる点は、被験者がテスト状況で、いかに図版とかかわっているかという水準である。Murrayでは、形式分析の客觀性を保持するために300語以下の物語を分析不可能なものとして取り除くとしている⁶⁾。それに対して、Bellakでは、分析場面での抵抗と同じく、物語の短さの中に分析の指標を見出そうとした⁷⁾。とりあえず、ここでは以上の2つの水準に分け、以下に筆者が考えるTAT解釈の前提について記してみたい。

第1の水準として上げた同一視仮説は、被験者が図版に描かれた人物に仮託して、内的な衝動や行動特性を語るという投影の機制を前提としている。形式分析では、被験者が同一視した物語の主人公を定める基準が設けられている。(例えばMurray⁸⁾、戸川⁹⁾)もちろん、主人公を通して自己を語らしめるような特性がTAT図版にあるにしても、全ての反応についてこの仮説を適用することはできないのではないかと筆者は考えている。その理由は、反応に示された対人関係が果たして自己-他者関係をそのまま反映していると考えてよいかどうかという問題にある。この点を明確にするために、セクシャ

ルカードである13MF図版の反応例を上げてみたい。

＜反応＞テレビみたい。…女のは死んでいる。…朝で、男の人は疲れている。この人が殺したかどうかはわからないが冷静。…知り合いではあると思う。あんまり親しかったら取り乱したはず。そんなに親しくない。女の人が死んで困るわけではない。

どちらかというと貧弱な反応であり、被験者が図版に接近し、自己を関与させることにためらいのあることが感じとれる。こうした反応の場合、図版への抵抗という先に上げた第2の水準を考慮する必要があり、反応に示された人物のどちらかに被験者が同一視しているとは考え難い。こうした反応の場合、セクシャルな雰囲気をもつ図版を前にして困ってしまっている被験者の様子、即ち、同一視して人物像に情緒を付与することに抵抗がある被験者自身の様子を、検査者は印象として把えている。とすれば、こうした反応の場合は、とり合えず同一視仮説はおいておき、まず図版へのかかわりという第2の水準を問題にする必要があるわけである。これで図版と被験者との交流の手がかりは得られることになる。

そこで、次に問題になるのは、反応に示された人物像が被験者の何を示唆するのかという点である。Bellakの視点からすれば、先の反応は性衝動の抑圧や攻撃性の潜在とその取り消しといった自我の防衛機制を中心に解釈がなされることになる。こうした点は十分考慮すべきであることを認めた上で、筆者は、示された人物像とそれら相互のかかわりにより以上の重点を置くべきではないかと考えている。この反応の場合であれば、自分と図版上に示された2つの対象表象は切り離されている。しかも、2人の人物像の関係づけは希薄である。このことから、セクシャルな関係に安心して入るだけの自己表象が未だ確立しておらず、この被験者にとってセクシャルな関係は、自我異和的な対象表象の中で非常に浅いレベルでのみ把握できると推察できる。

このような解釈は、対象関係論的な内的対象論（小此木¹⁰⁾）が前提とされている。この観点を明確にしておくためにKernberg, O.¹¹⁾のこの点についての記述を引用しておく。「対象関係論は、対人関係の内在化に対する精神分析的接近であり、対人関係がいかに精神内界の各構造を決定するかに関する学問である。また、これらの精神内界の各構造が、過去の内在化された他者との関係および現在の対人関係との脈絡において、いかに保存され修正されあるいは再生されるかを研究する学問である。対象関係論は、精神内界の各対象の世界（精神に内在化された他者との関係）と、個人のもつ現実の対人関係の相互作用を取り扱うものである。」

TATに表わされた人物像を、Kernbergのように内在化された他者像とするか、それともSpiegelmann, M.¹²⁾のようにユング派の主唱する元型が示される可能性を認めるかという問題は残される。この問題は今後に譲るとして、本論では、エネルギー論的発想から、Gurtrip, H.¹³⁾の言うような「対象関係的思考」（object relational thinking）への移行について、もう少し記しておく。

Gurtripは、Freud, S. の精神力動論の精神生物学的な側面を批判し、よりパーソナルな対象関係の基盤へと理論の再方向づけのなされた経緯について詳しく論じている。その中心的論点は、Freudの本能エネルギー論的思考への批判にある。Freudの本能論は、年代的な移ろいの中で用語を変更しながらも、常に生得的に色づけられた方向性をもつエネルギーとして記述されていく。そして、最終的に2つの先天的な基本本能として、エロスとタナトスが仮定された。そして、対象はそれらの欲動の派生物であるとされた。つまり、Freudにとって、対象とは、欲動に満足を与えられた時、即ち目標に達した時に、それに付随する外的事象が記憶痕跡としてとどめられたものと考えられる。Freudにとっては、本能的な欲動こそが第1次的なものであり、対象は第2次的な派生物とされているのである¹⁴⁾。

それに対して、Gurtripでは、こうした本能エネルギー論的な方向づけを批判し、性を「欲求的自我反応」（appetitive ego-reaction）、攻撃を「防衛的な情緒的自我反応」（defensive emotional ego reaction）と考えている¹⁵⁾。Freudが対象を欲動充足の対象とし、自我をその欲動コントロールの主体と考えたのに対して、対象関係的な把え方からすれば、自我は本来的に「対象希求的」（object-seeking）（Fairbairn, W. D.）¹⁶⁾であり、自我と対象とのかかわりこそが第一義的なものとなる。Gurtripは、FreudからHartmann, H. に継承された精神生物学的な自我のあり方を「システム自我」（system-ego）とし、対象関係的な全人格的な把え方を「パーソン自我」（person-ego）と呼び、区別した¹⁷⁾。

筆者の認識が、上述のようなパーソナルな基盤を前提としていることを確認した上で、次にTATの1事例を上げ、対象関係的な観点を基に解釈を試みたい。

事例及びその検討

ここに上げる事例は、筆者が女子大学生に実験的に施行した事例の内の1つである。被験者は、大学3回生で社会福祉学専攻である。ここでは、TAT-Murray版の内、12枚を施行している。反応については、テープに

録音したものを逐語的に記した。

＜図版1＞

反応：（14”）この子は……すごく悩んでいるところです。（うん）こういう言い方でいいんですか。別に（はい）悩んでいて、で、バイオリンの練習が進まないっていうか、それでバイオリンを続けるべきかどうか悩んでいるのと同時に、それを誰にも相談できないから、どうしようっていう、自分に対して、自分のとるべき行動についても悩んでいるところです。（はいはい）（1'01”）

解釈：Murray¹⁸⁾は、TATを「何らかの危機場面を暗示していること」を1つの前提として創り出し、その危機場面をどう処理していくかについての空想を手がかりに解釈しようとした。図版1には、少年がまさに直面している課題状況が示されている。この図版では、ほとんど全ての被験者が少年と同一視し、少年とバイオリンとに仮託して、課題状況への取り組みについての姿勢を述べる。

この被験者は「すごく悩んでいる」とバイオリンの練習の行きづまりについて述べている。しかも、感情調としては、大きな重荷として示されている。ところが、一方で物語の転回は乏しく、結末も欠いている。また、「こういう言い方でいいんですか」という、第2の水準から把えられる反応もある。1図版は最初のカードであり、新しい状況へのかかわり方を推測する手がかりにもなるということを念頭に置きつつ、次のように解釈することができる。

この人は、新しい状況に置かれると、すぐに自分の内界をそこに関与させるというよりはむしろ、まず準拠枠をつくり、そこに何かを見出す、つまり、自由をある程度制限し、安全な枠組の中で課題にむかう態度をもつ人であると考えられる。

この反応の最も興味深い点は、テスト状況では被験者に「こういう言い方でいいんですか」と承認を求めている一方、反応では悩みを誰にも相談できない様子が示されている点である。また、Bellak¹⁹⁾では、この図版に示される親イメージの吟味を中心においているほど、この図版には親についての言及が多いのであるが、この人が親について述べていないのも1つの特徴である。こうしたことからすると、この人は、新しい場面では外的要請に応じようとしているが、一方で内的な動きをかなり封じてしまうかもしれない。親が導入されないことだけで親イメージについて云々することはできない。しかし、この人が、すごい悩みの中で相談できる人物を見出せないことは、十分に感情表出を認め支持してくれる親に代表されるような人物表象を内側に持っていないというこ

とも考えられる。それ故、まず外的な枠組をつくり上げ、それから独力で少しずつ内界を関与させていくという人なのである。とり合はず、ここでは以上のような仮説を掲げておき、以下の図版と照合しながらより具体的に考えていきたい。

＜図版2＞

反応：（31”）この女人人が、いつもここ歩いている道なんんですけど、あの、その道で誰かと会う約束をしてここで待っているんですけど、ただ待ってるんじゃなくて、見慣れた光景ですよね、うしろで見えてはいないんですけど、そういう、あの人たちの、あの、例えば馬が啼いているとか、馬に声をかけているのを背中で聞いて、たたぼんやりしている中に、そういう音がこう聞こえて、で、なんかこう、落ち着いている感じ（うん）で、もうすぐ人がちょうどこの辺から来て、来るんだけどまだ気がついていない（うん）ぼんやりしている様子（うん、はいはい）（1'58”）

解釈：この図版は、TATの中で唯一3人の人物が描かれている図版である。そして、この3人の人物を物語の中にどのように導入し関係づけていくかが分析上の1つのポイントとなる。人物相互の関係づけをすぐさま、対人関係の処理能力と結びつけるむきもある。（例えば坪内²⁰⁾）Murray²¹⁾がこの図版を作成するにあたり、前景の女性を一見雰囲気の異なる後景の絵に組み入れたという意図を汲むならば、まず、前景の人物と後景の雰囲気の相異性を物語の中でどう処理したかに注目すべきであると考えられる。

この被験者の反応の特徴は、3人の人物について直接言及することなく、前景の人物と後景とのvividなかかわりが微妙に示されているところである。前景の人物は、後景の人物と直接関係をもっているのではなくて、図版には描かれていない人物を待っているのである。氏原²²⁾では、前景の人物と後景を、田舎と都会・自然と文明・意識と無意識という相対するものとして把える見解を示している。もちろん、2図版の全ての反応についてこの仮説を適用するのには無理があると思われる。しかし、この反応の特徴や、また、この被験者が青年後期にあり自立と依存・善と惡といった両極性を自分の中でどう位置づけていくかを課題としているとする、こうした仮説に従うことが有効になると思われる。

この観点からすると、被験者はまだ、内的にも対外的にも泥臭さを引き受け認めていくところまではいかず、泥臭さは今だ渾然一体となって背景に追いやられたままである。後景と女性とを結びつけるものは、唯一馬の啼き声である。Bellak²³⁾では、馬の強調を「退嬰

的で非現実的なサイン」と述べているが、ここではむしろ、馬は土臭さ・身体性・無意識的な自然の有り様といったものを代表するものと考えた方がよさそうである。ただ、この背景は、被験者にとって「見慣れた光景」であり、「落ち着ける感じ」を与えてくれるものである。すると、この人にとって、人間の土臭い側面は、切り捨てるべきものではなく、大切なものとして感じられてはいると推測できる。逆説のことではあるが、この人が外にいる待人（全体的人格としての他者を予感させる者）と出会うためには、内的な土臭さを切り捨てるのではなく、まず、それらと幾分かなりとも直面することから始めなければならないであろう。この人が対外的に未知なる人と出会うことは、内なる他者—現在は十分生きられない側面を表象する像—と出会うことと裏腹の関係にあるのである。

<図版3 GF>

反応：（32”）今まで眠っていたんです。（うん）この暗い部屋で眠っていて、それで、おもてにこう、こちらの部屋に出ようとしているんですけど、なんか悲しいことがあって、明るく笑って顔を向けられない。（うん）で、こちらにはまだ誰もいない。ここには、この人ひとりしかいないんですけど（うん）自分の気持ちがこう、ふさぎこんでいるため、顔を上げられない。（うん）（1'14”）

解説：この図版の分析のポイントは、どのようなトラブルが生じているか、どんな人物が導入されているか、そのトラブルを乗り切れるかといった点である。

この反応でも「なんか悲しいこと」として情緒的に沈んだ様子が示されている。しかし、その悲しみがなぜ生じたか、具体的にそれがどんな悲しみなのかという点については示されていない。これが筆者を交えたテスト状況での反応であることからすると、この人にとって「悲しみ」という記号で示される内容は、決して他者と共有できないような私的な領域にとどまる心的内容をさしているのであろう。反応に示されたように、悲しみの中にはこの人の意識にのぼるのは、「明るく笑って顔を向けられない」他者の存在である。1図版で考察したのと同様に、この人にとってトラブルとは独力で乗り越えるべきものであって、独力で問題を克服した時に初めて他者と出会えるのであろう。内的には自らの悲しみを共有してくれるような人物表象をもたず、外的にも他者の中に自分の困難を共有してくれるような見守りの目を発見し難いのであろう。

また、この反応の1つの特色は、主人公が眠っていた領域から他者のいる領域への移行段階にあることである。とりあえず、この移行を自立と依存というテーマに沿っ

て考えるならば、この人にとって自立とは依存を断ち切ることによって可能となると感じられているのかもしれない。我々が自立という課題を遂げられるのは、十分な依存が前提となっている時ののみである。そして、西井²⁴⁾の指摘するように、自立とは、依存を絶対的に否定する時に可能となるのではなく、依存がより成熟したものとなる時に、それに支えられて可能となるのである。

自立をpersona-formationとかかわらせて考えるなら、我々が自立した他者と十分に向き合えるのは、personaが多様な内的事象を反映できるものとなった時である。personaが悲哀を表現できない時、人はその悲哀をpersonaをはいだ肉塊のようなものとして表出してしまったのではないかという恐れを抱くか、あるいは完全に悲哀を押し切ってしまうかという選択肢しかもてない。そして、そういう人は、恐らく、他のpersonaに表わされた悲哀をもまた、受けとめることができないのであろう。

この被験者の場合は、反応からしてその中間段階にあるように思われる。この人の柔軟なペルソナ創りの鍵は、現実の他者によって悲しみを受け入れられ、全体としての心的内容の裏づけを外側から得るところにあると思われる。もちろん、このことは、裏返せば、この人自身が悲しみの裏づけを内側から与え、他者の中で生きることをも意味しているのである。

<図版4>

反応：（21”）これは恋人同士で（うん）もう、あの、帰らなければならない、別れなければならない時間が迫ってきて、こう、男の人が出ていこう、帰ろうとしている時に、女の人が別れを惜しんでいるというか、まだ行かないでほしい、でも行かなければならぬっていう、そんな会話になる場面。で、この人は、今外向いているんですけど（うん）もう1回この恋人の顔を見て、もう行かなければならぬということで、で、ふたりは納得して、また今度っていう感じで（はいはい）（1'23”）

解説：この図版は、TATの3枚のセクシャルカードの1枚目であり、異性関係を打診するカードである。

被験者は、ふたりを恋人同士とし、別離の場面を設定している。主題としてはポピュラーな筋であるが、出て行こうとする男の人に対して、別れを惜しむ女の人は、受動的で物分かりのよい恋人として示されている。この図版では同一視仮説を採用してもよさそうであり、その観点からは次のように考えられる。恐らく、この被験者は、異性に対しても強い思慕をもちながらも、異性と対等に向き合うよりはむしろ、受動的な構えの中で関係をつけようとするのであろう。前述の独力でことを成し遂げようとする態度と考え合わせると、この人の慰めは、

気持ちを察して「顔を見て」くれるような異性の中に見出されるのであろう。そして、それは男女関係においてもpositiveな側面だけでかかわり、negativeな情緒を関係の中にもちこまづ葛藤を避けようとする態度が背景となっているのかもしれない。

＜図版5＞

反応：(13") この部屋で、このうちには、今、この人ひとりいたんですけど（うん）なんか、となりの部屋で、なんか物音がしたから、で、何かなっと思って、この部屋をのぞいているところです。（うん）で、結局、この部屋には何もなかったので、あっ空耳かということで帰るんではないかと思います。（うんはいはい）(35")

解釈：この図版は、母親像を打診するのに優れているとされ、手前に部屋にいる子供を想定することが多い。

この被験者は、家にたったひとりでいる母でもお手伝いでもない無名の人物を1人想定しており、これだけでも非常に淋しい感じがする。Henry, W. B.²⁵⁾は、このカードについて次のように述べている。「母親の罰に不安を抱いている人は、このカードで、情緒的な感情の動きを全て自分で抑えこんでしまうため、反応は単に部屋の中にある家具など物を列挙するにとどまる。」この人の中には母親の罰に対する不安があるかどうかはともかく、図版の中の人物にはぐくみ見守ってくれるような母性的なものを見出せないことは確かである。こうした内なる母イメージをこの図版の人物に映し出し得ない点については、7GFのところで合わせて考えることにする。

＜図版6 GF＞

反応：(52") 親戚のおじさんなんです。（うん）で、今、このふたりだけじゃなくて、部屋にはたくさんの人気がいて、で、この娘さんが、んっと、ソファーがあってこっちにもたくさん的人がいて、で、こうみんなで楽しくおしゃべりとかしていたんですけど、この親戚のおじさんは帰ることになって（うん）で、そうとは気づかないで、ずっと話に夢中になっていたんですけど、で、「帰るよっ」でこうそばにきて、伝えに来てくれて、「あっ」で振り返った瞬間です。で、そっと帰ればいいんだけど、わりとあいさつというか、この人にまお親しいから、こう帰りますからねってひとこと言って、で、だからこの人は来たんで、びっくりしているのと、まだ帰るってことに気がつかなかったので、そうですかっていうことで、また今度お話ししましょうってことで、このおじさんは帰っていく。で、この人も、気にしながらも、あの、本当はもうちょっとこの人と話をしたかったんだけれど、また今度ということにして、で、またこの周囲にいる人の接待やらおしゃべりに戻ると思います。

（うん）(2'37")

解釈：この図版は、父娘関係を抱えるカードとされているが、筆者の少ない経験の中でも、誘惑の場面が設定されることが圧倒的に多い。坪内²⁶⁾でも「年長の男性イメージカード」とされている。

被験者は、中間的な存在である親戚のおじさんを想定した。そして、そのおじさんは、「まお親しい人」であるが、女性とは一対一で向き合ってはいない。女性が、周囲にいる人々の中でおしゃべりをしている時に、おじさんはふいに「帰るよ」と声をかけにくる。被験者は、おじさんと話したいような気もするが、一方で大勢の中の1人としての態度をもち続け、おじさんと一対一で向き合わない。おじさんを、とりあえず、年長の異性を代表する者と考えるならば、この人には年長の男性と何らかの親しい関係をつけるだけの用意がなく、「また今後ということにして」という言葉に表わされるように、この人は年上の異性との関係のあり方を見つめ直す時期にあるのかもしれない。また、男性を父とも誘惑者ともしないことは、男性イメージの確立の保留を示していると考えてよいかもしれない。そして、ここでもやはり、2図版で触れた土臭さや4図版でのnegativeな情緒といったものを関係性の中でどう把え直すかが鍵となっているようと思われる。

＜図版7 GF＞

反応：(25") この女の子は遊び相手がほしいんだけど、遊び相手がいなくて、ずっと退屈しているところです。（うん）で、これはお人形で、ひとりで遊んでいたんだけど、誰かに相手をしてもらいたい、誰かに遊んでもらいたいと思って、人を捜しているんですけど、今、おばさんは、たぶんこの家庭の家政婦さんで、でも、その人と遊んでほしいなって思って来たんだけど、その人は読書に夢中で、気がついてくれない（うん）気がついても、ちょっとこう、あの返事をするくらいで、全然話にのってくれなくて、で、どうしようかなって思って、ここには来て話しかけるんだけど、うわの空で、家政婦さんは本を読んでいるので、あっちに行こうかどうしようかと、ちょっと迷いながらたたずんでいるところです。（うん）(1'23")

解釈：Bellak²⁷⁾は、この図版について次のように述べている。「このカードは、女性の被験者にとっての母と自分の幼年期の関係を打診する重要なものである。この少女の視線がそっぽを向いた状況なので、しばしば母に対しての否定的な感情や態度が引き出されやすい。」

この被験者の反応では、少女の母に対する否定的な感情ではなく、反対に少女が「遊び相手をほしい」のにそ

れを受け容れない「家政婦さん」の態度が示されている。この家政婦さんは、本を読むことに夢中で「全然話にのってくれない。」この図版の特性上、娘がそっぽを向き、母（あるいは家政婦）がその娘に働きかけているという反応が出やすいのにもかかわらず、このような反応が出されたことから、母-娘関係についての何らかの問題が暗示されていると考えた方がよさそうである。この反応から、すぐ様幼少期の母-娘関係について云々することには無理がある。しかし、少なくとも、この人の内的世界では、母なる対象イメージは、自分を導き支持してくれるものとは程遠いようである。5図版でも、母なる者を見出しそこから見守られる子供を導入するという連想がみられないことは、上のような仮説を裏づける。支持してくれる母を見出せないことは、支持される自己を確認し難いことと結びつくのであろう。反応中、少女は「あっちに行こうかどうしようか」と迷いながらも、結局「たたずんで」しまっている。Winicott, D.W.²⁸⁾では、何かを行うことの前にまず存在すること、誰かといてかつひとりでいることの経験を強調する。即ち、Winicottによると、重要な他者にひとりの人間として確認されることこそが存在することの要件なのである。この反応で示された少女は、家政婦さんに見守られそこに存在したいという願いをもちながらも、その人に見られていない。それ故、「まずゆったりと呼吸をしてそこにいること」の経験をもてず、結局何もできないでたたずんでしまっているのである。そして、Winicottの言葉を借りれば、「主観的対象（subjective object）の世界」で遊ぶことも、「行儀悪くできる能力」（capacity to naughty）の獲得もままならぬところにあるのであろう。

ただ、ここで、強調しておかなければならぬことは、反応中の少女はこのような一見深刻とも思える様相を示しているが、このことをすぐ様被験者自身に当てはめるのは早計であるように思う。問題で触れた水準の問題からすると、被験者は、第1の水準からは、存在することも遊ぶことも十分にできない少女を描き出しているが、第2の水準と考え合わせると、非常に逆説的なことが導き出せる。即ち、反応ではこれほど遊べない少女を描き出しながら、実際には、被験者は、TAT図版を「遊び」の中で主観的対象を十分操ることによって反応を出しているという点である。こうした2つの逆説的な側面をふまえると、この人は、的には先に上げたような少女の心性を保持し続けながらも、一方でそうした心性を象徴化し扱っていくことのできる健康さを備えた人であると考えられるわけである。

<図版10>

反応：（30”）これは、この昔の恋人って、ずっと昔の恋人だったんですけど、ずっと離れ離れになっていて、で、その人たちが再会した時で、その昔の楽しかった時と同時に、その再会をすごくこう、かみしめているところで、抱き合っているところ（うん）別に、この人たちとは、こう昔は恋人で、今は他の恋人がいるというんではなくて、今はそれひとり、だから、その人を思ってずっと思い続けて、で、ただ、何らかの理由で離れ離れになっていて、で、もう会えないかと思って、でも忘れないから、他の人といっしょになるってこともしなくて（うん）ずっとと思い続けて、で、ただ何らかの理由で離れ離れになっていて、で、もう会えないかと思って、でも忘れないから、他の人といっしょになるってこともしなくて（うん）ずっとと思い続けている人が、偶然にも会うことができて、もう本当だったらうれしくって声も上げたいんだけど、声を上げなくて、その気持ちがあるだけに却ってこう、かみしめているっていうか、喜んでいるところ（うんはいはい）（1'47”）

解説：この図版はセクシャルカードの2枚目であり、2人の人物の関係を中心に分析する。ここで示されているのは、相手のことを一途に思なながらも何らかの理由で離れ離れになり、偶然に再会した恋人である。ふたりはともに相手のことを思い続け、再会を喜び会っている。そのことからすると、この人にとて男性は、気持ちを分かちあえる者として想起されているようであり、異性との心的な出会いの可能性は感じとれる。

しかしながら、一度別れたにもかかわらず、他の恋人と交際しない一途で純真なふたりが別離の事態を迎えている。そして、何よりも気になるのは、その理由が示されないという点である。

図版4でも触れたように、心の隙間を埋めてくれるような分かり合える存在としての異性をこの被験者は求めているようである。ところが、異性との関係の中で体験される感情は、非常に一面的なもののように思われる。我々の結ぶ関係が、真に生き生きとしたものとなるのは、愛と憎しみ・信頼と不信・暖かさと冷たさといった二面性を受けとめ、かつpositiveな側面を優勢なものとして体験し、negativeな側面をくいとめられる時であると筆者は考える。こうした観点に立つと、この被験者の異性との関係は、どちらかというとpositiveな側面だけが強調され、negativeな側面が除外されがちであるのかもしれない。それ故、再会の場面においてもnegativeな事態を十分に伝えないで「何らかの理由で離れ離れになった」という、いわば背景を欠いた別離であるために、平板で

希薄な印象を与えるものとなったのであろう。この辺の事情については、13MFとからめて後にもう少し考えてみようと思う。

＜図版12F＞

反応：(31") この人が、今、すごく自分自身に対して疑問をもっていて(うん)で、自分が今考えていること、自分の感情や考えていることに対して、これでいいのかどうかと思って、その、こんな悪いことを考えていいくんだろうか(うん) その自分の、別になんでもないことをするんじゃないなくて、よからぬことをたくさんでいたりとか(うん) そのことに対して、よからぬことを、よからぬことを、これでいいと思っているんじゃないなくて、それに自分自身が疑問をもっているっていうか、自分で自分を見つめた時に、いやこれでいいのかなあ、私はこんな悪い人なのか、いやそれでいいんだという葛藤が心の中にあって(うん)で、そのそういう心情を、これはだから実在するんじゃないって、その人が心にそういう、こちやこちやこちやこちや思っていて、ひょっとしたら自分は悪いのではないかと、こう、意識したものだと思います。(うん) だから、実際には誰もいないんですけど(うん) あの、これは、自分はやましいのではないか、自分の中に悪がいるのではないか、ひょっとしたら、これが自分のかっていうことで、その、自分に対して疑問をもって、ちょっと、ちょっと恐くて、振り返っているところ(うん)で、その自分が思っている感情や考えっていうのは、別に今に始まった、こっちの人がどうのこういうんじゃなくて(うん) これからしようと思っていることに対してそう思っているんじゃないなくて、今までの過去の自分に対してそういう感情を抱いて、ひとり、そう、ひとりふっと考えた瞬間。(うんはいはい)(3'07")

解釈：この図版では、この被験者が示したように、背景の人物を実在する人としてではなく、若い女性の悪魔的な心の化身としてイメージされることが多い。Spigelman²⁹⁾では、このカードで母親イメージの悪魔的な側面や女性における影の問題が示されるとしている。

この被験者は、背景の人物に仮託された悪い対して「私はこんなに悪い人なのか、いやそれでいいんだという葛藤が心の中にあって」と自ら述べているように、悪の両価性の故に悪いを感じている。悪を排除し善の中に生きようとする試みによって、自らの悪を否認できると同時に、他者の中の悪をもまた寄せつけず、二面性を備えた全体的人格としての他者をも失うことになる。それ故、なんとか悪と折り合いをつけたいのだが、悪を受け容れるにはあまりにも悪の威力が大きく自分の手には余るような感じがするのであろう。そうしたところで悪に

対する両価性が生じていると考えられる。このことは、図版での土臭さ・無意識性とのかかわりと同様の態度を窺わせるものである。ただ、被験者の悪に対する関心というか、必要性といったものを深く感得している様子は、影についての同じような事柄の周辺を何度も巡っているところから窺える。また、ここでも取り組むべき影の問題の提起と同時に、影を切り捨てず、図版の人物の中に象徴化して示す被験者の能力の高さをもまた感じとっておくことは必要だと思われる。Birkhäuser-Oeri,S.³⁰⁾が白雪姫の物語の解釈を通して語っているように、女性にとって、こうした悪との葛藤の出現は、新しい統合可能性を示すものであると考えられる。

＜図版13MF＞

反応：(1'36") この女人が寝ているところに、この男の人がやってきて、この人たちは恋人同士なんだけど、このふたりの間になんかこう傷が、傷っていうか溝ができるて、この場面に来た時にそれに気がついて、今までお互いにこう愛していると思っていたのに、こう、やってきた時に、会話をしてその中で、いやそれは実は違っていたということに気がついて、この男の人は嘆いているっていうか、ショックを受けて、自分に対してこう、自分自身について情けないって思う反面、相手に対してもこう、腹立ちもあって、で、この女人の人も同じような気持ちを感じていて、で、直接お互い顔を見合せられなくて静止したような(うん)たぶんふたりは、このまま別れ別れになって、もう恋人同士にはならないと思う(うん)……この女人の方が諦めているっていうか、醒めてしまっていて、男の人はまだ未練じゃないんだけど、なんかまだ疑問を、なんかこういう事態に対してどういうことなんだろうかという気持ちが残っているんだけど、女人人は全然こっちを振り向いてくれず無視するので、このまま立ち去ろうといふところ(うん)これは女人の家です。(うんはいはい)(3'46")

解釈：この図版は最後のセクシャルカードであり、4図版及び10図版に比べると肉的なエロスが前面に出ている。このエロスを対象関係の中でどう扱っていくかが解釈上の1つのポイントとなる。

被験者は、とりあえずふたりの関係を恋人同士としながらも、ふたりの間に「溝ができた」としている。この溝も「実は違っていたということに気がついて」できたものであり、特に具体的は理由は示されず、心の理由なき隙として表わされている。

この図版では、多くの場合、男女関係の危機場面、特にエロスと結びついたnegativeな情緒のからみが表現される。そして、この男女間の関係は、いわばnegativeな

情緒を付与されるが故に一層深いかかわりとして把えられるのである。この被験者の場合、10図版で考察したのと同様、やはりnegativeな側面を関係の中で把えず、心の理由なき間隙の事態を招いてしまう可能性がある。Sullivan H.S.³¹⁾は、青年期の課題の1つとして、性的欲求をいかに「欲情力動」(lust dynamism)として人格の中に組み込んでいくかという点を上げている。欲情力動とは、単に発達に伴って生じる欲求とは異なり、「対人状況の中で特徴的に示される比較的永続的なエネルギーの状態」のことである。この被験者は、Sullivanの言うような欲情力動を築き上げるには至っていないのであろう。そして、また、男女関係の間隙について男性の立場から述懐されるところにこの被験者の特徴がある。女性はもう醒めてしまっているのであるが、男性は疑問をもちながらも女性に問い合わせることなく立ち去ってしまう。

このあたりは、7GFで示された養育者の前で立ちつくすことと一致したところがある。この被験者にとって、相手から示された拒否は、すぐ様関係の喪失を意味するようである。本来、拒否とはある関係があるが故に生じるものであり、その打開をあえて行うことは、新しい関係性を築き上げる試みであると考えられる。そして、打開の源泉となるのは、関係の中に未だ生かされていない影-否定的な気分や情緒-であると思われる。先にも触れたようにSpigelmanでは、12Fの背景の人物の中に、魔女的な母と個人的な影の両方の示される可能性があるとしている。12Fで考えた影の問題や、母親カードやセクシャルカードにおける対象関係の希薄さからすると、この被験者が、対人関係における間隙を埋めるためには、今一度、negativeな母、影と内的に折り合いをつけることから始める事になろう。

〈図版19〉

反応：(56") これは森の奥深くにある家で、(うん) これが煙突で、で、窓があって、それでそういう家があるところに、こう、こちらで誰かが見た瞬間っていうか、出くわして、その家をこういう印象として見た(そう)自分が森で道に迷ってすごく不安が高くて、それが何か道を捜し捜し歩いて来たんだけど、わからなくて途方に暮れているところに家があって、その時夜ももう夕方少し越えたくらいで、で、自分の中の不安の方が強くて、家を見つけた喜びよりも、なんかこわいものが出てきたらどうしようっていう不安が高くて、普通の家なのに下でこう草がのびているのが波のようにうねって見えたり、このうしろの、これは木か、家の裏にもみの木ぐらいの木があるんだけど、それがうねって見えて、すご

くこう、こわいものを見たような印象を受けて、それからもう夕暮れのへんに明るくもなく暗くもなく奇妙な色をして、雲のこうメラメラメラメラ見えている感じが、それにさらに輪をかけて、これは周りの木もいっぱいあるんだけど、それもまた幻しのように見えて、そういう森で道に迷った人が、山小屋を森の奥で見つけた時に、すごく不安になって、家をこんな風に見てしまった。(うん)で、一瞬ひるんで逃げようかと思うんだけど(うん)よく我に返ってみるとふつうの家だったってことで、まだこわいんだけど戸を叩いてみて、で、ここには木こりが住んでいて、で、道を教えてもらって、ちょっとはここで休んでいきなさいってことで、その疲れからも不安からも少し安らぎをえられる。で、あとは、教えてされた道の通りに帰っていくとちゃんと帰れた。(うん)(4'07")

解釈：この図版は、TAT図版の中で最もあいまいなものである。Bellak³²⁾では、「多くの場合、有用なものではない」とされているが、反対にこの図版のあいまい性を評価して用いようとする人もある。坪内³³⁾では、この図版の抽象的な刺激をいかに意味あるものとして把え、反応するかという点から、知覚統合力を吟味するという立場をとっている。これは、ロールシャッハテストにおいて、インクプロットを知覚し、ある概念にまとめ上げるという統覚作用と同様の仮説である。そして、その統覚する力を吟味した上で、反応に加味された内容が何を示唆するかを検討することになる。

一方、Spigelman³⁴⁾では、ユング派の立場から、この図版について次のように述べている。「このカードのあいまい性や夢幻的な性質が、神話的な素材と関係するモチーフを表わす可能性がある。」

多くの事例では、中央の部分を小屋かまたは船とし、場面の状況説明に終わり、必ずしも物語が語られるわけではない。本事例のように、豊富な素材を加味した物語が展開されるのはかなりまれなことである。

この反応では、坪内³⁵⁾が主要部分として上げた小屋が物語に取り入れられ、周囲を森の情景として把えたわけであり、知覚統合力そのものは十分である。それ故、この反応は、あいまいな図版特性を十分生かした反応であり、その特異性は、この人の現実吟味力にまつわる病理性に帰因せられるものではない。むしろ、十分な知覚統合力を基礎とし、その上で心理的内容を加味した創造性に富んだ反応であると考えられる。先に記したように、この図版では状況の述懐が多いのに対して、この被験者は、森の中をさまよっている人物に自分を仮託し、こわさや不安について述べている。それだけ、この人がこの

絵の中に多くの心的内容を投影したと考えられ、その投影された心的内容と図版のあいまい性が織り混ざった形で体験されていると考えられる。そして、そのあいまいで不気味な情景での体験を、森の中をさまよう人に仮託して語るところがこの人の創造力を示している。von-Franz, M. L.³⁶⁾の言うように、森は無意識層を象徴するものであり、この反応の不気味さは、被験者自身の内なる闇、意識化されない領域を予示するものであると考えられる。その未だ意識的に未統合な内容はさまよう人を脅かすが、この反応では道を指し示すものとして木こりがおかれている。ここで、木こりは深層における混沌に光をさし導くという役割を果たしている。図版に描かれていない人物として木こりを導入できることは、この人が無意識層とのかかわりにおいて、木こりに象徴化されるような心性－意識と無意識を仲介し秩序づけるもの－を備えていると考えられる。それ故にこそ、半ば恐れながらも、無意識的な闇に足を踏み入れることができるのであろう。

〈図版20〉

反応：（1'00”）夜の郊外で、都会からちょっと離れたところで、外燈もまばらな、そんなところで（うん）遠くにあの繁華街というか、家がたくさんあるちょっとにぎやかな、あの、夜でも少し明るいところがあって、その電気がある、こちらから窺えるんですけど、ここは暗くて、で、外燈がまばらにあるんですけど、その暗さのために、本当はちっちゃな明かりなんですけど、すごくこう明るく見えて、で、本来そんな人がいないはず、まぁ、通りすがりの人が、まぁ、何回も人は通ると思うだけれど（うん）ここ、ある人が通った時間は、まず人がいないと思われる時間で、で、暗いところを歩いているところに、その外燈の下に、ひとりの人影らしいものがこう見えて（うん）で、まだこの絵の時は、そういう人が見えて、あれっていう時で（うん）で、まだそのこの人は、こわいこわいとか、そんなんは全然感じていないんですけど、しばらくして、何でこんなところに人が、しかも立ち止まって外燈の下にいるのかなんていうことを考えて、すごくこわくなって（うん）で、立ち止まって、こう、歩けなくなっている。（うん）で、でも、あの戻るんじゃなくって、ゆっくりと歩いていく、自分の行くところはもうちょっと向こうで、この人の横も通らなければならないけど、こわいっていうか、なんかこう本当はいるべきでない人がこんなところでじっとしているっていうのと、その人が全然何者であるのかわからない危険が、ただ、ふつうに立っている何もない人のかもわからないんだけど、で、ちょっとちゅうちょし

ただけれど、しばらくしてからがんばって歩こうと思って、で、この人に向かって近づいて、で、たぶんこの人は別に声もかけなくって、ただここにほんやりと立っているだけの人で、で、通り過ぎても、通りすぎても振り返っても、この人はここにじっとこう立っているから、その恐怖、今まで恐怖というのが強かったんだけど、その人を気遣う気持ちにかわっていて、でも声を掛ける勇気もないから、そのままこの人は立ち去ってしまう（うん）で、あとにやっぱりこの人は残されてただぼんと立っている。で、この人自身、たぶん、すごく淋しいことがあって、この外燈の下で孤独感を味わいながら、こう、ほんやりとこう、自分を振り返ってみたりで、むしろこう、自分を振り返ることすらしなくて、ただ、何も心に感じない。本当にほんやりといつたらいいんだと思うんですけど、心が無の状態で、こう（うん）呆然としている。で、すごく静かな人（うんはいはい）（5'07”）

解釈：この図版の特徴は、画面全体の圧倒的な暗さであり、坪内³⁷⁾は「TAT体験を通じての語り手の自己洞察が独自的に語られる」と述べている。

この被験者は、図版19で深く図版とかかわったこともあり、時間をかけて独自な話を語っている。被験者は、まるで夢の中での体験でもあるかのように、外燈の下の人物に近づいていく。この図版では、図版19と同じく、多くの被験者が状況説明に近い反応を示すことを考え合わせると、この被験者は、外的事象に対してより多く情緒を付与する人であると考えられる。徐々に外燈の下の人物に近づき、恐さ・不気味さが迫るが、「横を通らなければ」と近寄る。得体の知れない人物として外燈の人物が見られていることからして、この人影は12Fや19で示されたような影－被験者の中の生きられていない側面－を象徴するものかもしれない。すると、この人影に対する被験者の興味は、先にも触れたように、この人のより自分の幅を広げようとする実現可能性を示すものと考えられる。

事例解釈のまとめ

以上12枚の図版それぞれについて解釈を試みた。読者も気つかれるであろうように、ここでのTAT解釈は、いわゆる客観的診断を目的とするものではなく、むしろ解釈者自身が被験者の反応に深くコミットし、それによって得た解釈者自身の直観的・主観的な印象を手がかりとしたものである。というのは、筆者にとってTATを試行する目的は、多くの場合、今後被験者と心理療法過程を辿るために、その指針なり方向性を得るために行うものであるからである。それ故、ここに提出した事例解釈

は、筆者が仮にこの被験者と心理療法過程を歩むとした時に必要とされる、いわばmapのようなものである。このmapは、単に被験者自身の心的世界の見取り図であるばかりでなく、解釈者と被験者との交流の世界のありさまを示すものもある。そして、このmapは、被験者自身が心的内容を検査者の前で示しうる限界とともに、解釈者自身の共感能力や心理学的な認識の限界にも規定されているものである。こう考えると、TAT解釈というものは、心理療法過程に入る時に、その門口で解釈者自身が被験者と共に歩んでいくための道標であり、しかもそれはある程度先までのぼんやりとした見通しとともに、その途上で考え直されねばならない解釈者自身の思い込みをも同時に含んでいるものであることは念頭においておかなければならない。

こうした解釈の意義について確認した上で、次に本事例解釈をまとめておきたい。

まず、全ての反応について言えることは、この被験者がTAT図版を自らの心的内容を表現するためにうまく用いているということを指摘しておかなければならない。このことは、問題において第2の水準として指摘しておいたことでもあり、また7GFでの解釈においても触れたが、この人は、検査者をも含んだ対人関係的なテスト場面において、自らの漠然と感じている問題をTATに仮託してうまく表現している。いわば、内的葛藤から目をそらすことなく、心的内容を象徴化して扱っていく能力が高いということができる。図版上では、この人の独力でことをなそうとする態度について触れた。TATでは、いわば独力で物語を構成し検査者に言語によって伝えなければならないわけであり、こうした独力でことをなしていく力の強さとTAT反応の豊かさとは関係深いと思われる。そして、何よりも強調しておかなければならぬのは、この人がこうした独力とでも呼ぶべき能力を発揮できたのは、心的内容を加味された被験者のTAT反応を熱心に傾聴する検査者のいるテスト状況に支えられてのことであるという点である。こうした点から考えて、この被験者が仮に解釈者とともに心理療法の旅に歩み出した場合、セラピストの方は、この人の象徴化し葛藤を受け止めていく力に信頼し、提起される問題を受容し反映するよき受け皿となることが必要とされるであろう。TATを反応継列的に見た場合、この被験者は、図版を追うことなく深く図版に関与しているようである。このことは、反応時間の増加にも表されているし、また、検査者の興味を引くような特徴的な反応が増していくことからも窺える。こうしたことから、心理療法を始めた場合、この人はセラピストとの関係の中で徐々に独自な

自分というものを表現し、問題について考えしていくだけの健康さを備えた人であると考えられる。

以上は、問題に上げた第2の水準の視点より導き出した推論である。そして、次に問題にしなければならぬのは、第1の水準、即ち反応内容そのものから導き出される心理療法の方針である。第2の水準より推測されたこの人の問題を扱う能力への信頼や検査者との関係性を先のように受け皿に喻えるなら、この方針は、いわばセラピスト側がもつmesのようなものである。

個々の細かい被験者の特徴については各図版での解釈に委ねるとして、ここでは中心的課題についてだけ述べることにする。筆者は、現在のところ、心理療法の基本的指針として、次の2つの視点を中心に据えている。1つは、河合³⁸⁾がユング派の立場からつとに指摘するように、意識的には十分生きられていない相補的な無意識内容に触れ、それを生きたものとして自我領域に取り入れていくことである。そのプロセスは、まず個人的に未だ生きられていない影との対決から、内なる異性へ、さらには無意識をも含めた全体的中心である自己（Selbst）へと向かうという。もう1つの視点は、ある事柄についての両義的な観点を得ることである。桑原³⁹⁾は、人格を二面的に捉えるTSPS（Two-Sided Personality Scale）という尺度を作成した。その1例を上げると、「話し好き」というpositiveな特性は、「おしゃべり」という特性の裏であり、また「話し好き」の逆は「口数少ない」、「口数少ない」という特性についての裏は「むっつりした」というnegativeな特性である。我々にとって、「話し好き」と「口数少ない」の相反する両面を生きることは難しく、また「話し好き」は「おしゃべり」に、「口数少ない」は「むっつりした」にも通ずることを認めていくのは、大変な努力を要する仕事である。しかし、心理療法においては、往々にしてこうした仕事が必要とされることが多いと思われる。

本事例の被験者の場合、まず意識的に把えうる課題は、対人関係における溝を埋めていくことであろう。その溝とは、単に対人関係的な技術が未熟であるということに由来するのではなく、この人が人間の泥臭い部分を自分なりに受けとめていないことによると考えられる。この人が青年後期にあることを考え合わせると、女性としての身体性や対人関係において生じる否定的な情緒を排除するのではなく、いかに対象関係の中で生きたものとして体験しながら、かつそれらに圧倒されないで対峙できるかということが中心となりそうである。とりあえず、ここでは、こうした未だ対象関係の中で十分生きられていない側面を、ユング派の人たちにならい影と呼んでお

く。そして、仮に心理療法の道を辿るとするなら、この影がより具体的に何を含んでいるか、そしてクライエントは影とどのような関係をもっているかを探りながら、影をも生きる手立てをセラピストとともに探っていくこととなる。この被験者の場合、図版2や12F、19などで触れたように、影に対して不気味さと同時にその必要性なり意義なりを十分感じているようである。それ故、筆者が第2の基本的指針で述べた両義的な観点より、影の恐ろしさとその豊かさといった両面性を確認していくことも必要となろう。そして、その課題を果たすためには、7GFで触れた母なるものの脆弱性をも考え合わせておく必要があり、心理療法におけるセラピスト－クライエント関係でこれを補っていくこととなろう。

以上、TATを施行した解釈者が、この被験者と心理療法過程をともに歩むとした場合に必要とされると思われる問題点について記した。この被験者の場合は、先に触れた象徴化する能力や問題と向き合う態度が備わっており、必ずしも心理療法によって上述のような影と対決しなくとも、日常の対人関係の中でもある程度課題を果たせるとも考えられる。しかしながら、影との対決、しいては個性化過程は常に苦痛と不安定さを伴うものであることは、我々人間に於て避けられぬ事実なのである。聖書は次のように語る。「神は傷つけまたつつみ、撃ちていため、またその手をもて善く癒し給ふ」(JOB 5:18)⁴⁰⁾

(付記) 本論考は、広瀬が施行したTATを解釈する際に、氏原との数回にわたる討議を経、最終的に広瀬がまとめたものです。よき素材を提供して下さった被験者の方に感謝至します。

文 献

- 1) Morgan, C. D. & Murray, H. A. 「Method for investigating fantasies The Thematic apperception Test」 *Arch. Neurol. Psychiat.* 3 : 281 (1935)
- 2) Laplanche, J. & Pontalis, J. B. 村上仁監訳「精神分析用語辞典」みすず書房482 (1977)
- 3) 戸川行男「絵画統覚検査解説」金子書房 (1953)
- 4) 和田種久「TATに関する研究－主として分析表示法を中心にして－」精神神経学雑誌54: 254 (1952)
- 5) Bellak, L. 「The TAT and CAT in clinical use」 Grune & Stratton (1971)
- 6) Morgan, C. D. & Murray, H. A. 「Thematic apperception test」
- 7) Bellak ibid.
- 8) Murray ibid.
- 9) 戸川 前掲書
- 10) 小此木啓吾「現代精神分析の基礎理論」弘文堂 (1985)
- 11) Kernberg, O. 前田重治監訳「対象関係論とその臨床」岩崎学術出版社 (1983)
- 12) Spiegelman, M. 「Jungian Theory and the Analysis of Thematic Test」 *J. of proj. tech.* vol. 19 252
- 13) Guntrip, H. 小此木啓吾・柏瀬宏隆訳「対象関係論の展開」誠信書房 (1981)
- 14) このあたりの事情については、Guntrip ibid. 第3章「転回点：精神生物学から対象関係へ」を参照されたい。
- 15) Guntrip ibid.
- 16) Fairbairn, W. D. については、小此木の前掲書によった。
- 17) Guntrip ibid.
- 18) Murray ibid.
- 19) Bellak ibid.
- 20) 坪内順子「TATアナリシス」垣内出版 (1984)
- 21) Murray ibid.
- 22) 氏原寛「心理診断の実際」誠信書房 (1986)
- 23) Bellak ibid.
- 24) 西井克泰「自我同一性の様相－依存性と対人関係をめぐって」心理臨床学研究VOL 3. 2. 48 (1986)
- 25) Henry, W. E. については坪内の前掲書によった
- 26) 坪内 前掲書
- 27) Bellak ibid.
- 28) Winicott, D. W. 牛島定信訳「情緒発達の精神分析理論」岩崎学崎出版社
- 29) Spiegelman ibid.
- 30) Birkhauser-Oeri, S. 氏原寛訳「おとぎ話における母」人文書院 (1985)
- 31) Sullivan, H. S. 中井久夫・山口隆訳「現代精神医学の概念」 (1976)
- 32) Bellak ibid.
- 33) 坪内 前掲書
- 34) Spiegelman ibid.
- 35) 坪内 前掲書
- 36) von-Franz, M. L. 氏原寛訳「おとぎ話における悪」 (1981)
- 37) 坪内 前掲書
- 38) 河合隼雄「心理療法論考」新曜社 (1986)
- 39) 桑原知子「人格の二面性測定の試み－NEGATIVE語を加えて－」教育心理学研究 第34巻第1号31

(1986)

40) 聖書 ヨハネ記第5章18節 日本書協会 (1980)

(昭和62年10月12日受理)

Summary

In this study, TAT responses, which were made by a university woman, are interpreted from the standpoint of the object relational thinking.

In the problem the writer explained about the object relational thinking, which is the writer's basic standpoint. The object relational thinking is indicated as the total personal understanding by Guntrip, H., who criticised the biopsychic side on Freud's theory.

And, as the premise of interpretation of TAT, are the first level and the second level devised. The first level is the point of view putting how a subject grapples with TAT plates in question, while the second level is the point of view calling how a tester interpret the contents of TAT responses into question.

From the abovestated recognition, quoted from the theories of Jung, C. G., Sullivan, H. S., Winicott, D. W., etc., is TAT interpreted. This subject, all things considered, makes a "gulf" on interpersonal relationship. The "gulf" is made not by her immature of interpersonal skills but by "shadow" which she has never integrated.

Finally, as a conclusion, the writer indicated about the meaning that the writer uses TAT on clinical practices and about the problems which should be expected when this subject could trudge on the therapeutic process with the writer (therapist). It is expected in therapeutic relationship that the therapist and the subject (client) would search for "shadow" which she has never experienced.